

笹川記念保健協力財団 奨学金支援

助成番号：2016-5

(西暦)

2017年 2月 16日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団

理事長 喜 多 悦 子 殿

2016年度奨学金支援

完 了 報 告 書

標記について、下記の通り完了報告書を添付し提出いたします。

記

所属機関・職名 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 医歯学系専攻博士課程
全人的医療開発学系心療緩和医療学分野・博士課程学生1年生

氏名 角甲 純

2016 年度 奨学金支援（国内） 完了報告書

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
医歯学系専攻博士課程全人的医療開発学系
心療緩和医療学分野 博士課程 1 年
角甲 純

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科の博士課程に進学して 1 年が経過しようとしています。看護学を学び保健学の修士号を取得した私としては、教育課程が医学博士である当研究科に入学し学ぶことについて、不安と期待の両側面があったかのように記憶しています。不安については、「医師ばかりのなかでやっていけるか」というものであったと思いますが、私が所属しています心療緩和医療学分野では、医師以外の職種の方が非常に多く、また、医師の方もとても素敵な先生ばかりで、すぐに払拭されました。期待については、「新しきを学び経験すること」でしたが、教授の松島先生をはじめ、多くの先生や先輩方にお力添えをいただくことで、特に、緩和医療学分野における研究遂行という面で達成されつつあるように感じております。

博士論文の研究テーマは、「進行期がん患者の呼吸困難に対する送風の有効性についての無作為化比較試験」で取り組んでいます。進行期がん患者が体験する呼吸困難については、エビデンスレベルの高い介入はない現状がありました。そこで、がん以外の分野で注目を集めつつありました送風試験（扇風機を用いて三叉神経第 2～3 枝領域（以下、顔と表記）に向けて送風するという試験）に着目し、進行期がん患者の呼吸困難に適用させることはできないかと考えました。研究立案当初、研究方法は進行期がん患者という対象の特異性からリクルートに難渋する可能性があるため、必要対象者数を大幅に削減できる無作為化クロスオーバー比較試験で実施することを考えておりました。しかし、クロスオーバー比較試験を実施するにあたり、第 1 期の介入と第 2 期の介入の間に設ける、回復期間を設定する根拠となるデータがありませんでした。そこで、まずは、扇風機を用いて顔へ送風したのち、呼吸困難強度はどの程度の時間で送風前の強度に復帰するのかを探索する、パイロット研究を実施しました。

パイロット研究では、安静時呼吸困難 numerical rating scale（以下、NRS） ≥ 3 であった患者 9 名を対象に、送風なし・下肢へ送風・顔へ送風、の 3 パターンの介入を各 5 分間行いました。送風なしと下肢へ送風を行った理由は、どちらがよりコントロール群として適切かを判断するためです。各介入前後における呼吸困難強度の変化は NRS を測定しました。その結果、顔へ送風後、9 名中 6 名で呼吸困難 NRS の低下が見られましたが、6 名中 4 名は観察期間の 60 分を超えても送風前の呼吸困難 NRS に復帰しませんでした。なお、送風なしと下肢へ送風では、介入前後で呼吸困難 NRS に変化は見られませんでした。この結果から、顔へ送風後の呼吸困難 NRS が送風前の値に復帰するまでには 60 分以上を要する可能性があり、同時に回復期間として 60 分以上（実際には何分であれば十分かは不明）

を設定することは困難であると結論付けました。パイロット研究の結果については、その一部を5月にスペインのマドリードで開催されますMASCC/ISOO2017のAnnual meetingで発表を予定しており、その他に第22回日本緩和医療学会学術大会にもエントリーしております。論文については、現在査読中です。

パイロット研究の結果を受け、無作為化クロスオーバー比較試験から、無作為化比較試験へと変更し、倫理審査委員会へプロトコルを提出しました。倫理審査委員会から承認を得た後、2016年10月から「進行期がん患者の呼吸困難に対する送風の有効性についての無作為化比較試験」のリクルートを開始しました。必要症例数は介入群・コントロール群各20例ずつの計40例です。現在、18名の方がエントリーされています。

今回、介入研究のPrincipal investigator（以下、PI）を役割としておりますが、このような経験は初めてで、多くの方の協力を必要としました。特に、松島先生の方針を、「博士課程の学生に求められる姿勢として、必要なリソースは自分で得てくるもの」と理解しております。共同研究者となっただいては先生方とディスカッションするために必要な知識を得る過程、プロトコルの作成、英文誌へ投稿するための執筆など、多くの学ぶ機会をいただきました。次年度の課題は、①パイロット研究の論文publish、②研究の遂行／完遂、③論文投稿準備として、進めていきたいと考えております。

最後になりましたが、2016年度奨学金支援を頂戴し、心より感謝申し上げます。この学びを臨床に還元できるよう、今後も努めていきたいと考えておりますので、変わらぬご支援・ご鞭撻を頂戴できますと幸甚です。